

第四回和辻哲郎文化賞 一般部門 受賞作

野口 武彦 著『江戸の兵学思想』（1991年2月25日 中央公論社 刊）

野口 武彦 のぐち たけひこ 昭和12年（1937）生まれ。東京都出身。専攻は、江戸文学、江戸思想史。東京大学大学院博士課程単位修得中退。神戸大学文学部教授（受賞時）。現在は神戸大学文学部名誉教授。著作は、『谷崎潤一郎論』（亀井勝一郎賞）、『江戸の歴史家』（サントリー学芸賞）、『「源氏物語」を江戸から読む』（文部大臣賞）、『幕末気分』（読売文学賞）、ほか多数ある。

受賞のこぼ

第四回和辻哲郎文化賞をいただいたのは、一九九二年だから、今から十五年前のことになる。選者の一人だった司馬遼太郎氏も鬼籍に入られて久しい。

現代でこそ日本近辺も方々がキナクさくなっているが、当時は湾岸戦争が起きた翌年のことで、戦争はまだ遠い海彼の出来事という時代だった。「兵学」はかなり奇異な感じで受け取られていたのである。

兵学は戦争の思想ではない。

江戸時代の儒学は、平和を「常」と考え、戦争を「変」と考える。それに対して兵学は、世界はいつも相争う諸勢力の動態としてとらえ、治世はその均衡状態に他ならないと考える。《平和とは、異なった手段による戦争の延長なり》

拙著に今日の社会にも通じるメッセージが生き残っていたら幸いである。

※本誌の為に執筆。

《選考委員評》

司馬 遼太郎

江戸封建制というのは、私ども日本人の目からみれば、惚れぼれする。ヨーロッパにも、このように精密な封建制はなかったのではないか。

むろん、たくさんの欠陥をみとめた上でのことである。まことに諸藩ごとの一種の絶対王政で、じゃ、あなた江戸時代にうまれたいですか、といわれればご免こうむる。しかし、ヨーロッパが、十六世紀から十八世紀までの絶対王政を経たおかげで、ひとびとがビジネスをやる能力を身につけたように、日本の江戸封建制も、近代という、ひとびとの“業務能力”を必要とする社会への準備段階だったといえる。

江戸期をおおざっぱに言えば、戦国期の二百数十の武装団体が、武装体制のまま“武ヲ偃めて”収税のための民治にむかった時代である。むろん、武は休んではいるが、“治ニイテ乱ヲ忘レ”ない程度に保持している。そのくせに、文治をやる。中期以後は、藩によっては商工業者になったように、殖産政策もとる。流通は発達し、幕府は貨幣政策につねに大苦勞していた。

江戸後期の冷静な経世家の海保青陵^{かいほせいりょう}などは、“君臣も商売である。君は臣の忠誠心と能力を買い、臣はそれらを君へ売る”といい、武士が商品経済を離れて存立しえない、といった。

さらに大いなる矛盾は、そのくせ、江戸期の官学が朱子学だったことである。儒教（朱子学）という文治主義が大看板になっているのに、店内に入ると、商品経済や武装集団になっている。

「倭において“士”と言うのは兵のことである」

といったのは、江戸中期の將軍吉宗のころに日本にきた通信使の製述官の申維翰であった。士とは、儒教では高度の志をもつ者のことを言い、兵とはじつにいやしい。日本では兵を士とよび、尊んでいる、と儒教文明の絶対的な信奉者である申維翰は『海游録』のなかで^{わら}嗤う。

その矛盾の場にいた思想家たちが江戸時代の兵学者で、野口武彦氏は、その亀裂の苦しみを、個々の場においてえぐり出し、一隅角からみた江戸の姿を展開している。『江戸の兵学

思想』によって江戸論は深まったといっている。

陳 舜臣

江戸の官学であった朱子学によれば、学問とは具体的には修身齐家治国平天下の全体を内容とする。学問は儒にほかならず、その内容はどうか「政治」にきわめて近い。

「戦争は他の手段による政治の継続である」というクラウゼヴィッツの有名なことばを、東アジア風にパラフレーズすれば、「兵法は他の手段による儒の継続である」となるであろうか。中国にかぎらず、日本でも『孫子』などの兵法を論じた者が、すべて儒者であったのはとうぜんであろう。合戦に明け暮れた日本の戦国時代には、日本人の手になる『孫子』の注釈書は一冊もなかった。戦争らしい戦争のなかった江戸時代になって、荻生徂徠や新井白石の国字解や兵法積などがつぎつぎとでた。このことを手がかりに、江戸時代を理解できないであろうか。野口武彦氏のこの著作は、そんな要望にこたえた名著である。

江戸時代を見直そうという声が高まって、もうずいぶんになる。江戸期は二百数十年間、ほぼ平和がつづき、人口はさして増減せず、GNPもそうであったといわれている。

明治維新の近代化の成功は、江戸時代に培われた土壌のうえにはじめて可能であったというのが、ほとんど定説となっているようだ。まさに現代が師とすべき時代ではあるまいかという発想が、江戸ブームの底にある。

野口武彦氏はブームのはるか以前から江戸学研究にうちこんできた人である。研究以外に、評論、創作とはば広い活躍をしているので、あえて「学究」と呼ぶことを避けた。本書は「兵法」を軸として、ユニークな時代思想論を展開し、横のひろがり縦の流れとが織りまぜられ、じつにわかりやすい。堅いテーマであることを気にしてか、所々にうちくつろいだ表現がみられるが、その必要はなかったようだ。この種の著作は明解でなければならない。それを達成したのは、野口武彦氏の文章力の勝利というべきであろう。

梅原 猛

野口武彦氏の才能はかねてから目を見張るものがあると思っていた。徳川時代の思想史が氏の専門であるが、氏には鋭い現実感覚があり、それが抽象的な思想史を論じさせても単なるアカデミズムの学者と違った生き生きした著述を作成せしめている。

今回の『江戸の兵学思想』にもそれは言える。つまり、江戸時代は三百年続いた太平の時代である。この太平の時代に兵学なるものは生まれたのである。つまり兵学というのは既にそれだけで一種のアイロニーであり、観念の学でもある江戸の兵学思想の変遷を野口氏はこの本で詳細に語ったのである。

この本来実用学である兵学が観念の学と化し、しかもそれが一種の権威になり、また次に受け継がれていくという過程を野口氏は実におもしろく分析した。これは兵学のアイロニーというより、江戸時代そのもののアイロニーであるかもしれない。

この和辻哲郎文化賞は第一回の久保喬樹氏、第二回の宇佐見齊氏とどちらかといえば新人の受賞が続いたが、第三回の受賞者は中西進氏という堂々たる大家である。野口氏は大家と新人との中間とあってよいかもしれないが、今回、この賞はやはり現役の大家と新人の中間の人に与えるべきであり、もう現役を引退した学者の積年の学問的功績に報いるという性格のものではないことが改めて確認された。

野口氏は健康を害されたということであるが、今後ますますの仕事を望みたい。一級の才能であることは間違いないのであるから、一級の仕事を実らせていただきたい。